

# 冬 の 日 記

今年の冬は大理石との格闘で過ぎてしまった。所は関ヶ原、家康が本陣をかまへたといふ丘も近くにある古戦場で、凡そ芸術とは無縁の血まなくさい夢の跡であるが、私にとっては久振りの大理石の大作といふ気負った気持が、天下分目とまではゆかなくとも、いざ御座んなれといった野心と幾分の悲壯感を抱いて戦端を開いた。

あの辺は東海道本線中最も雪の多い所と知っていたが、伊吹山下ろしの吹雪には北海道生れの東男もたちと不覚をとる有限で、弓矢ならぬ鑿の刃先もしばしば鈍ぶる日もあり、残念ながら受大刀つづきの戦況はあたかも豊臣方の姿であった。

元々徳川家康といふ人物には好感をもっていない吾が心境を、狡猾なる彼の亡霊が逸早く傍受して秘かに万全の策を敷いていたのかも知れない。

飛び散る大理石の粉が伊吹山から吹きつける雪の粉よりも冷たく痛い毎日で、戦果上らぬ肅条たの気持で帰る凍てついた夜道は、古里のそのように情緒あれるものではなかった。しかし、疲れきっている筈の気持とは逆に神経の方はえらく高ぶって、吹きだまりの雪がミケランジェロの彫り残しの多い未完成の作品に見へてきてギョッとすることが度々であった。

ギリシャ、ローマはさておいて大理石彫刻の頂点といへばミケランジェロである。彼のほとんどの作品を見て歩いた中でミラノのカステロ・スフォルツェスコにあるロンダニーニのピエタ像に、感動といふものの極限を与へられた感激は忘れられない。人間の叡知と技術の昇華された存在とでも云いたいその作品の前で、足が痺れ背筋が硬直してしまったことを思出す。

ミケランジェロは四つのピエタを刻んでいる。ローマのサン・ピエトロ大聖堂にあるのが第一作で23才の作。誰が見ても20代の青年が作ったとは想像も出来ないキリスト教美術の傑作の一つとされている。それから66年後のロンダニーニのピエタは、89才で亡くなる6日前まで彫りつづけた絶作であり、ミケランジェロ芸術の集大成した結論である。

それはまことに神の手が刻んでいったと思はれる清

## 山 内 壯 夫

澄枯淡な鑿跡で、すべてを許した深い信仰の淵に引入れられてゆくような作品であった。

ミケランジェロの生涯は野心、傲慢、反叛、闘争、苦悩、孤独、諦観と大きな振幅で流れている。それは当時のイタリアの歴史のめまぐるしさと相通ずるものを感じさせる。その烈しい<sup>も</sup>坩堝の中で偉大な自己の確立を為しとげた力は一体何処からきたのだらうか、そんな想ひにふけりながら、強者どもの亡霊が眠っている関ヶ原のうす暗い停留場で帰りのバスを待っているのが冬の日の日課であった。



ロンダニーニのピエタ